The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『廻国奇観』という邦題について
Author(s)	五之治, 昌比呂
Citation	日本語・日本文化. 2020, 47, p. 27-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75878
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

『廻国奇観』という邦題について

五之治　昌比呂

1. はじめに

エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kämpfer, 1651-1716）は、1690 年 9 月から 1692 年 8 月まで、出島商館医として日本に滞在し、日本に関する情報や資料を精力的に収集したドイツ人である [1)]。帰国後の 1712 年、彼はラテン語による著書を出版した。タイトルを略さずに書くなら、

> Amoenitatum exoticarum politico-physico-medicarum fasciculi V, quibus continentur variae relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectae, ab auctore Engelberto Kaempfero, D.

となる。これを日本語に訳せば、

> 政治学的・自然学的・医学的主題に関する異国の魅力ある事柄、五巻：著者エンゲルベルト・ケンペル博士が東方世界の旅行において注意深く収集したペルシアとアジア極地に関する様々な報告、観察、描写を含む

となる。

本稿はこの書物のタイトルをめぐる論考である。現在、この書物は『廻国奇観』という邦題で知られている。これまで稿者はこの邦題に疑問を持つことがなかったし、それを話題にするような先行研究にも出会ったことがなかった。しか

し、あらためて考えてみると『廻国奇観』というタイトルは不思議である。上記のタイトルの大まかな内容は示しているが、ラテン語から自然に出てくる訳語ではない。また、そもそもこの邦題を誰が付けたのかも知られていない。結論から言えば、この疑問の答えは完全にはわからない。それでも可能な範囲で明らかにしてみようというのが、本稿の目的である[2)]。

2.『廻国奇観』と『日本誌』について

ケンペルが生前に出版できた本は、事実上『廻国奇観』一冊のみである。しかし、ケンペルの著作として現在名高いのは『日本誌』という邦題の著作である。これは死後の出版なのであるが、その出版事情は少々複雑である。本稿の内容とも深く関係するので、繁雑ではあるがここで紹介せざるを得ない。

まず『廻国奇観』であるが、これはタイトルのとおり日本のみを扱った著作ではない。ペルシアやインドなどでの見聞にもとづく論文を多数ふくんでおり（ペルシアに関するものが多い）、加えて日本の製紙法や茶についての論文など、日本に関する論文が六編収められている。また、第 5 巻（Fasciculus V）は丸々日本の植物の研究に当てられていて「日本植物誌」と呼ぶべきものになっており、後に日本国内外の植物研究に重要な役割を果たすことになった。さらに、第 2 巻報告 14（Relatio XIV）をなす論文は、Regnum Japoniae optima ratione, ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum（最良の見識によって自国民の出国および外国人の入国、交易を禁じ、国を閉ざしている日本王国）と題されており、後に「鎖国論」として知られることとなる（その経緯は後述）。

ケンペルはこれとほぼ同時に、ドイツ語で Heutiges Japan（今日の日本）というタイトルの作品を執筆していた。これはほぼ日本のことのみを扱った著作であり、日本滞在中に得た知見と資料を十分に活かしたものであった。しかし、その刊行が実現しないまま、ケンペルは 1716 年 11 月に死去してしまった。ケンペルの遺産の多くは甥が相続したが、その中には「今日の日本」の手稿が含まれていた。その後甥は金銭難に陥り、遺産のうちの日本に関するコレクションをイギリスのハンス・スローン卿（Sir Hans Sloane, 1660-1753）に売り渡してしまった。

スローン卿はコレクションの中から「今日の日本」を公刊したいと考え、自分

のスイス人秘書ショイヒツァー（Johann Caspar Scheuchzer, 1702-1729）に編集と英語訳を命じた。この英語訳は 1727 年に *The History of Japan*（『日本誌』）のタイトルで刊行された。このときショイヒツァーは、「今日の日本」の原稿の翻訳に加えて、『廻国奇観』所収の日本に関する論文六編をラテン語から英訳し、*The History of Japan* の末尾に付録として置いた。この英語版『日本誌』は大きな反響を呼び、早くも 1729 年にはフランス語重訳とオランダ語重訳が作られた。

時代が下り 1773 年になってケンペルの最後の相続人であった姪の一人が亡くなった。すると、その遺品の中から新たな手稿が発見された。「今日の日本」には別の原稿が存在していたのである。『廻国奇観』を出版したレムゴー（ケンペルの出生地）の書店主はこの手稿の刊行を企画し、ドーム（Christian Wilhelm Dohm, 1751-1820）という若い学者にその編集を依頼した。ドームは編集作業を行うとともに、ケンペルの古いドイツ語を読みやすく書き換えた。こうして出版されたのが *Geschichte und Beschreibung von Japan*（『日本誌』、上巻は 1777 年、下巻は 1779 年に出版）である。ドームはショイヒツァーに倣って『廻国奇観』所収の日本に関するラテン語論文を自らの手で独訳し、これらを下巻の末尾に添えた。

ドームはいわゆるレムゴー原稿とショイヒツァーの英語版『日本誌』を並べて校訂作業を行ったが、スローン・コレクション中の原稿（以下「ロンドン原稿」、当時は大英博物館が所蔵）は見ることはなかった。ドームが利用したレムゴー原稿は現在行方不明である。ロンドン原稿は現在大英図書館が所蔵しており、他のスローン・コレクションとともにマイクロフィルム化もされていて、比較的容易に見ることができる。しかしそれは最近の話であり、ロンドン原稿は長らく注目されることはなかった。ケンペルの著作といえばもっぱらショイヒツァー版とドーム版の『日本誌』とその翻訳が読まれてきたのである。近年、ロンドン原稿の見直しが行われ、翻刻されて出版もされている [3)]。

以上のように、『日本誌』に関してはショイヒツァー版とドーム版の二つの系統が存在するわけである。稿者はかつて、付録の「鎖国論」の部分のみ、二つの版と『廻国奇観』のラテン語原文を比べてみたことがあるが [4)]、ショイヒツァーはかなり自由な改変を行っている。それに対しドームの訳はおおむね原文に忠実

である。それ以外の部分は細かく確かめていないが、『日本誌』全体にわたってその傾向があるのではないかと推測する。

ケンペルの『日本誌』は江戸時代の日本ですでに注目されていた。日本に輸入されたのはもちろんオランダ語版（*De beschryving van Japan,* 1729 年出版、ショイヒツァー版の重訳）である。日本における受容は大島明秀『「鎖国」という言説』に詳しいのでここでくり返さないが、最も古い記録としては、オランダ通詞吉雄耕牛が 1778 年に所蔵していたという記述がある。そして『廻国奇観』も江戸時代に輸入されていた。最も古い例としては、明和年間（1764-1772）にオランダ人が日本のある医者に『廻国奇観』を贈っていた、という言及がある（詳細は後述）。

3.『廻国奇観』という邦題と坪井信良

現在定訳となっている『廻国奇観』という邦題の初出は何か。稿者の知る限り、最も古いのは坪井信良『検夫爾日本誌』（ケンフル・にほんし、明治 13 年（1880））である。これはオランダ語版『日本誌』の全訳である。この翻訳は手稿でしか残っておらず、出版はされなかった。1997 年になってその写真版が霞ケ関出版から刊行され、現在はそれで読むことができる。

坪井信良（つぼいしんりょう、1823-1904）は幕末から明治にかけての蘭方医で、江戸時代に蛮書調所・西洋医学所教授を務めた後、明治に入ると東京府病院長を務めた。『日本誌』を翻訳したのは院長を退職した後である[5)]。

坪井の序文によれば、幕府の意向で弘化年間（1844-1848）に「司天台翻訳局」（天文方蛮書和解御用）において『日本誌』の全訳がおこなわれたという。翻訳にあたったのは、箕作阮甫、杉田成卿、竹内玄同、宇田川興斎、高須松亭の五人である。完成した翻訳は楓山文庫（江戸城内の幕府の文庫）に収められたが、維新の時に散逸し、坪井が探しまわったが見つからなかった。そのため坪井が自ら全訳したのだという。

坪井の訳文において「廻国奇観」[6)] というタイトルは、ケンペルの「自序」の訳文の中に最初に出てくる（霞ケ関出版の本では 35 頁、坪井はタイトルに括弧は付けていない）。その下には二行の割注があり、「アムーニタテス　エキソチ

カ」と書いている。その後の「ケンペル伝」「訳者緒言」でも、この書への言及がある箇所では「廻国奇観」と記している（本文中ではそうではないことについては後述）。

・原題のラテン語について

ここで原題のラテン語について説明する。上述のように原題は長いものであるが、重要な語だけを取り出すと、Amoenitatum exoticarum fasciculi となる。amoenitatum exoticarum は複数・属格形で、amoenitatum が「快さ」「魅力」を意味する名詞、exoticarum が「異国の」を意味する形容詞であり、「異国の魅力の」という意味になる。fasciculi は複数・主格形であり「束、まとまり」の意味で、便宜上「巻」と訳しておく。すなわち、三語で「異国の魅力の（五）巻」という意味になる。

原題は長いので略して呼ぶのは自然なことである。ケンペルは『日本誌』の手稿（「今日の日本」）において、この書を Amoenitates Exoticae と記した。これは最初の二語を複数・主格形にしたものである。ラテン語としては、fasciculi（巻）という言葉を略すのであれば、最初の二語を主格形に変えて呼ぶのは自然なことである。名詞の基本形は主格だからである。『日本誌』の訳書は、英語版、ドイツ語版、オランダ語版とも、このケンペルの著作を、ケンペルが記したとおり Amoenitates Exoticae と記しており、とくに翻訳はしていない。坪井はオランダ語版にある Amoenitates Exoticae をカタカナで音写して割注に入れたのである。なお、これを古典ラテン語の発音に近い読み方でカタカナ表記するなら「アモエニターテース・エクソティカエ」となる。坪井の表記は少々不正確であるが、複数・主格形の略称をきちんと伝えている。

・坪井が訳したのかという問題

それでは「廻国奇観」というのは坪井による訳なのであろうか。もちろんその可能性はある。しかし、そうではない可能性も彼の訳からはうかがえる。まず、「廻国奇観」は Amoenitates Exoticae の直訳ではない。にもかかわらず、そのことに関する説明がない。また、「自序」「ケンペル伝」「訳者緒言」のところ

では Amoenitates Exoticae を「廻国奇観」と訳しているのに、本文中ではどれも「廻国奇観」と訳していない。本文中で Amoenitates Exoticae への言及は日本の植物を紹介する部分に集中している（第 1 巻第 9 章、オランダ語版では 81 頁～ 87 頁）。そこで述べている植物のいくつかについて「詳しくは Amoenitates Exoticae を見よ」というような形で言及されている。坪井はこれを「廻国奇観」と訳さず「附録」「巻末附録」と記している。

その部分のはじめの方には紙の原料の木の説明があり、ケンペルは「それについて私は『廻国奇観』の中でより詳しく記述した」と書いている。その後ろに『日本誌』の訳者が「著者がここで言っている説明は「付録」に挿入されている」というコメントを付している。この箇所で坪井は「附録に詳説すべし」としか書いていない。先に述べたように、『日本誌』の巻末付録には『廻国奇観』所収の日本関連論文が訳出されており、その中には日本の製紙法の論文もある。そこには原料の木についての説明や図版もある。したがって、この箇所だけならば坪井の記述も必ずしも誤りとは言えない。しかし、他の樹木については付録に言及はない。したがって、Amoenitates Exoticae を「附録」と記すのは誤りである。坪井は後でそのことに気づいたらしく、「附録」に取り消し線をつけ右に「本草編」と書いて訂正している。しかし、「本草編」という記述も意図がわからないものである。冒頭の「自序」や「ケンペル伝」では Amoenitates Exoticae を「廻国奇観」と訳しているのに、なぜ本文でもそう訳さないのだろうか。

このような箇所を見ると、坪井は Amoenitates Exoticae という書物の性質についてよく理解していなかったのではないかと疑わざるをえない。繰り返しになるが、「廻国奇観」というタイトルは直訳ではない。ラテン語の知識なく Amoenitates Exoticae をそのように訳すためには、この書物の内容についてある程度知っている必要がある（詳細は後で論じる）。つまり、坪井はこの書を見たことがなく、「廻国奇観」も彼の訳ではないのではないかという疑念が生じるのである。

もしそうであるなら、「廻国奇観」という訳は、坪井の伝える弘化年間の『日本誌』の翻訳の中でなされた訳なのではないだろうか。坪井はそのタイトルだけを記憶していて、自分の訳書にそのまま利用したのではないか。坪井の訳文をす

べてチェックしたわけではないが、他の西洋の書物が出てくる箇所で、坪井はタイトルをカタカナで音写している。『廻国奇観』は特別な存在であるので単純には言えないかもしれないが、坪井が出てくる書物のタイトルをすべて邦訳しようとしたわけではないことは確かである。逆に、『廻国奇観』だけが邦訳されているということからも、稿者はそのように推測するのである[7)]。

4. 江戸時代における『廻国奇観』の受容とそのタイトル

「廻国奇観」という名称が、坪井信良の言う弘化年間（1844-1848）の『日本誌』訳に遡ると推測するなら、それ以前の状況はどうだったのかを確かめる必要がある。結論を先に言えば、その時期にラテン語の原題を邦訳した例は見られない。上述のような推測をするのはそのためでもある。本章では弘化年間以前の『廻国奇観』の受容について、古い順に見ていきながら、タイトルがどのように表されていたのかを確認していきたい。『廻国奇観』の受容については大島明秀の研究が非常に詳しいので、おおむねこれに頼って記述していく[8)]。

すでに触れたように、最も古い例としては、明和年間（1764-1772）にオランダ人が日本のある医者に『廻国奇観』を贈っていた、という言及がある。この記述自体は 1830 年のもので、漢学者、松崎慊堂（まつざきこうどう、1771-1844）の『慊堂日暦』10 月 4 日の記述である。ただし、これ以上の詳細は不明である。慊堂はタイトルを「アンモニタチツ」と記している。もちろん、これは明和年間にそのように呼ばれていたことを意味しない。慊堂については後述する。

・中川淳庵のツュンベリー宛て書簡

中川淳庵（なかがわじゅんあん / じゅんなん、1739-1786）は医者・蘭学者で、前野良沢、杉田玄白とともに『解体新書』を翻訳したことで有名である。ツュンベリー（Carl Peter Thunberg, 1743-1828）はスウェーデン人で、カール・フォン・リンネに師事し、植物学、博物学、医学を学んだ。1775 年に、ケンペルと同じく出島商館医として来日し、やはりケンペルと同じように日本に関する情報や資料、特に植物の資料を精力的に収集した[9)]。1776 年には商館長にしたがって江戸参府を行ったが、その江戸滞在中に中川淳庵は彼に植物学や医学について教え

を受けた[10)]。

帰国後のツュンベリーに淳庵が送った書簡が現存している。そのうち天明 2 年 3 月 9 日付（1782 年 4 月）の書簡の中で、淳庵は『廻国奇観』を送ってくれたことに対してツュンベリーに礼を述べている[11)]。淳庵は『廻国奇観』の現物を入手したのである[12)]。

淳庵はラテン語は読めなかったはずであるが、にもかかわらず『廻国奇観』を入手しようとしたのは、第 5 巻の「日本植物誌」の部分が有用であったからだと思われる。そこで紹介されている植物のいくつかには図が付されているし、日本語での名称も書かれている（漢字もある）。いずれはラテン語を勉強して読み解こうと思っていたのであろう。しかし、淳庵は 1786 年に 48 歳で死去してしまう。その後、淳庵蔵の『廻国奇観』がどうなったかはわからない。

淳庵はオランダ語で書簡を書いているが、『廻国奇観』については kaempfers amoenitates exoticae と記している[13)]。書名の部分は上述のように複数・主格形であり、原題の属格形を主格形に変えて呼んでいることになる。つまり『日本誌』での表記と同じである。この点については次章で考察する。

・木村蒹葭堂の言及

木村蒹葭堂（きむらけんかどう、1736-1802）は大坂の商人で収集家であった。彼に『蘭音類聚』という著作があった。1787 年頃に成立したと考えられている。しかしこの本は大正 12 年の関東大震災で焼失してしまった。焼失前にこの書を読んだ新村出が、その中に『廻国奇観』への言及があったことを証言している[14)]。

新村は『蘭音類聚』に挙げてあった洋書のタイトルのいくつかをメモしていたが、その中に『廻国奇観』が含まれていた。新村は自分で『異国奇事集』と訳しており、原名は長く、略して「アモニエニターテス・エキゾチカールム」という、としている。ここの書きぶりでは、『蘭音類聚』にそう書いてあったのか、新村が自分の知識で書いているのかがわからない。

2003 年に新村の元のノートが勝盛典子によって紹介された[15)]。新村のノートには二つ書かれており、一つ目は「アモニターテム」二つ目は「アモニタテツム」とある。蒹葭堂は『廻国奇観』と『日本誌』を混同している可能性がある

が、そのことはここではさほど重要ではない。新村の証言とノートからわかるのは、『蘭音類聚』には『廻国奇観』への言及があり、そこでは「アモニターテム」「アモニタテツム」と呼ばれていたということである。

新村の講演録にある「アモニエニターテス・エキゾチカールム」は、ラテン語に直すなら、amoenitates exoticarum であろう。amoenitates は複数・主格形、exoticarum は複数・属格形であり文法的にはおかしい[16)]。これを古典ラテン語の発音に近い読み方でカタカナ表記するなら「アモエニターテース・エクソティカールム」となる。

ノートから知られる「アモニターテム」「アモニタテツム」は amoenitatum（アモエニタートゥム）の音写であろう。こちらは原題の複数・属格形である。蒹葭堂が誰かから『廻国奇観』のことを聞いて書名を記録したのだとすれば、その人物は原題の最初の単語、amoenitatum を音でほぼ忠実に伝えたのだと思われる。

・本多利明『西域物語』

本多利明（1743-1820）の『西域物語』（1798）の中に『廻国奇観』への言及がある。ケンペルという者が日本へ渡来し、通詞から日本の古事を聞き出し、本国へ帰国後、「書を著せり」と書いている[17)]。その中には、神代から現代までの歴史が書いてある。また、その後も「アーレントイルシムベート」（オランダ商館長 Arend Willem Feith のこと）が江戸に二回赴き、「殊に日本の事に委く、書を著はしアモニタチユンと題号せり」と記している。続けて、「余、其書を閲すに」と書いており、ふつうに読めば「アモニタチユン」のことを指すととれるが、その後に書いてある内容はケンペルの『日本誌』に当てはまるようである。著者の名前も本の内容も誤っているので、本田が『廻国奇観』を見たとは思えない。しかし、本田は「アモニタチユン」という書名は聞き知っていたことになる。「アモニタチユン」は、不正確ではあるが amoenitatum（複数・属格形）の音写であろう。木村蒹葭堂の場合と同じく、本田にその情報を伝えた人物は、『廻国奇観』の原題の最初の単語をほぼそのまま伝えたのである。

・志筑忠雄『鎖国論』

志筑忠雄（しづきただお、1760-1806）は阿蘭陀通詞を務めた人物であるが、病気のために隠居して蘭書を読むことに没頭し、多くの著作、翻訳を残した。彼はケンペルのオランダ語版『日本誌』から付録の「鎖国論」の部分を翻訳し、1801 年 8 月に『鎖国論』というタイトルで手稿を作った。「鎖国」という言葉はこの志筑の翻訳から生まれたのである。原本は現存しないが書写されて流布し、多くの写本が残っている。

最近、志筑の『鎖国論』のかなり古い写本が翻刻され出版された[18]。志筑が脱稿した年の翌年の写本である。この翻刻を見たところ、『廻国奇観』への言及はなかった。ケンペルと『日本誌』については冒頭で説明している。「鎖国論」がもともと『廻国奇観』所収の論文であることまでは述べる必要がないと判断したのであろう。よって志筑の『鎖国論』は、『廻国奇観』の呼称については後代に何の影響もあたえなかったと言える。

・大槻玄沢『蘭畹摘芳』

大槻玄沢（1757-1827）の『蘭畹摘芳』（1817）に『廻国奇観』への言及がある[19]。和名で「阿魏」と呼ばれる「アサフェティダ」（asafetida, assafoetida）という植物[20]について説明しているところで、「ケンフル（人名）著すところのアモニタテス（書名）このものの図説あり。その草を命めアツサフーチダジスギュチンシスと曰う。」という形で言及されている（原文は漢文にルビ、書名の漢字は「空木泥答跕斯」）。

この部分は玄沢が翻訳に携わっていた『厚生新編』[21]を用いている。『厚生新編』第三十四巻の「阿魏」の記事はほぼ『蘭畹摘芳』の記述に一致する。『厚生新編』では「ケエムヘル」の「アムーニタチス」となっている[22]。オランダ語の粉本において、対応する「DUIVELS・DREK」の項を見てみると、書名は Amoenitates（アモエニターテース）となっている。これは複数・主格形である。上述のように、ラテン語を解する世界では主格形に変えるのは自然なことである。

『蘭畹摘芳』の続く部分（31 丁表）では、玄沢が自身のコメントを書いてい

る。そこでも「アモニタテス（空木泥答跕斯）」について言及しており、この書を読むことが肝要だとしている。しかし、かつてこの書を一友人が所蔵していたが、現在は他人が所有しており、どこにあるかわからないという。玄沢はその友人にこの書を見せてもらったことがあり、全編ラテン語で書かれていたこと、項目ごとに図を載せていたことを記している。その友人とは中川淳庵ではないだろうか。両人とも杉田玄白と前野良沢の弟子である[23)]。淳庵は『蘭畹摘芳』成立の 30 年ほど前に亡くなっているが、その死後、所蔵していた『廻国奇観』が行方不明になったということであろうか。

ともかく、玄沢が「アモニタテス」と複数・主格形で呼んだ理由は、元をたどれば『厚生新編』のオランダ語粉本にそうあったからである。ただし、『厚生新編』では「アムーニタチス」と記されているので、玄沢はあらためて粉本を読んで、より忠実に「アモニタテス」と記載したと思われる。

・松崎慊堂『慊堂日暦』

松崎慊堂（まつざきこうどう、1771-1844）は漢学者である。彼の日記『慊堂日暦』には三カ所『廻国奇観』への言及がある[24)]。

(1) 文政 7 年（1824）2 月 25 日　〇ケンフル（アンモニタチス）　ケンフル、西洋人。アンモニタチス、印度七国ノ事ヲ記ス、同人作。（以下略）

(2) 文政 11 年（1828）1 月 3 日　〇アンモニタチツ、余が看しところはこれなり。西学を習う者もまた読み得ず。羅甸語にて印度七国の事を書く。ケンフルは蘭語にて書く。この書は読むべしと云う。日本の事が主なり。

(3) 文政 13 年（1830）10 月 4 日　この書およびアンモニタチツ二書を録し、その国にて刻す。明和中に阿蘭（おらんだ）朝貢し、官医某君と語りその事に及ぶ。阿蘭は即ち二書を以て貽（おく）ると云う。アンモニタチツは、余はかつてこれを十束生のところにて観たり

（3）は本章の冒頭ですでに紹介した。これが正しいなら『廻国奇観』の日本への移入の最も古い例を伝えていることになる。慊堂はオランダ語はできないようである。（2）（3）によれば『廻国奇観』は「十束生」のところで見たらしい。十束生とは、掛川藩医、十束井斎（1783-1843）のことである[25]。十束井斎は桂川甫周の門人の一人だった人であり、オランダ語は学んでいる。慊堂の記述（印度七国ノ事ヲ記ス）は『廻国奇観』の内容に一致するので、井斎はこの書の現物を所蔵していたということであろう。

慊堂は『廻国奇観』を「アンモニタチツ（ス）」と呼んでいる。ラテン語では amoenitates という複数・主格形であろう[26]。本を見たと書いているが、本にあったタイトルを自分で読んだわけではなく、十束井斎からタイトルを聞いたのであろう（「アンモ」の部分も不正確である）。つまり、十束井斎は複数・主格形（古典ラテン語読みならアモエニターテース）でこの書を呼んでいたと思われる。

5. ラテン語タイトルを主格形で呼ぶことについて

確認のためここでもういちどタイトルについて整理しておきたい。『廻国奇観』の原題は長いものであるが、その中心語句だけを取り出すなら、amoenitatum exoticarum fasciculi となる。amoenitatum exoticarum は複数・属格形で「異国の魅力の」の意味であり、fasciculi は複数・主格形で「巻」を意味する。

前章の資料を見てみると、『廻国奇観』の書名を日本語に訳す試みはなかった。みな原題の最初の一語を、複数・属格形、もしくは複数・主格形で音写していたのである（中川淳庵は最初の二語をアルファベットで表記）。もし『廻国奇観』の現物を所有していたなら、あるいは現物を目の前に見ることができたのなら、ラテン語はわからないにしても、オランダ語学習者であればアルファベットは読めるから、このタイトルをそのまま複数・属格形（古典ラテン語読みならアモエニタートゥム）に近い音で呼ぶのが自然ではないだろうか。なぜ主格形（古典ラテン語読みならアモエニターテース）で呼んでいる記録が複数あるのであろうか。

『廻国奇観』の原書を見る限り、amoenitatum exoticarum が主格形に変えられて書かれている箇所はひとつもない。各巻（fasciculus）の扉と、偶数ページの上部

欄外にいちいちタイトルの最初の二語が印刷されているが、すべて属格形である。この主格形の出所としては、二つのことが考えられるであろう。ひとつは、ケンペルの『日本誌』である。ケンペルは『日本誌』の中で自著の『廻国奇観』に何度か言及している。その際すべて、最初の二語を複数・主格形にした形、つまり Amoenitates Exoticae と書いている（もしくはその省略表記）。先にも述べたように、ラテン語の知識があればこれはごく自然なことである。日本人で、『日本誌』は読んでいるが『廻国奇観』の現物は見たことがない場合、『廻国奇観』の知識は『日本誌』における言及に限られる。そのために主格形で呼ぶということは考えられる。しかし、このようなケースはほとんどないのではないか。

もうひとつの可能性は、西洋人がそう呼んでいたということである。中川淳庵の場合、『廻国奇観』の知識はツュンベリーから得た。ツュンベリーはラテン語が堪能であるし、『日本誌』も読んでいたので、『廻国奇観』を主格形で呼んでいたのであろう。淳庵が江戸でツュンベリーに様々なこと（とくに植物学）を教わる中で、ツュンベリーはこの書に言及する際、常に主格形を使っていたと思われる。上述の書簡が示すように、最終的に淳庵は『廻国奇観』の現物を手に入れたわけだが、その名残で書簡には主格形を書いたのであろう[27]。大槻玄沢は『厚生新編』の粉本に従って、「アモニタテス」という複数・主格形で言及していたが、中川淳庵からも、そのように呼ぶのだということを聞いていたかもしれない。

松崎慊堂の情報源は掛川藩医、十束井斎であった。井斎は江戸で蘭学を学んだ後、掛川に帰って没した[28]。慊堂が『廻国奇観』を見たとしたら、江戸に居住していた井斎のところでのことである。井斎がなぜ主格形で呼んでいたのかは謎である。慊堂の言を信じるなら、井斎は『廻国奇観』の現物を所有していたか、すくなとも現物を目の前に見ていたはずなので、原書のタイトルをそのまま属格形で呼んでもよいはずである。-tatum という語尾を「タチツ（ス）」と読むことは考えられない。やはり『廻国奇観』のことを知っている蘭学者から、この本は「アモエニタチス」と呼ぶのだと教えられたのであろうか。そして、元をたどれば、その情報源はラテン語を解する西洋人のだれかに行きつくのかもしれない。

6.『廻国奇観』という邦題についての考察

最初に述べたように、「廻国奇観」という名称の初出について、稿者が確認できた最も古いものは坪井信良『検夫爾日本誌』（1880）である。もちろん坪井自身がこのタイトルを考案した可能性はある。しかし稿者は、弘化年間（1844-1848）に行われたという『日本誌』の全訳事業の中で「廻国奇観」という邦訳が考案され、坪井はそれにしたがったのではないかと推測した。前章までで見てきたように、それ以前の言及では、タイトルをカタカナで音写する例しか見られなかったのである。

ケンペル自身の著書であるということで『廻国奇観』は特別な存在である。幕府の事業として『日本誌』を翻訳するにあたり、訳者たちはこのタイトルも邦訳せねばならないと考えたのではないだろうか。しかし、『日本誌』（序文、訳者による解説等も含めて）の中でタイトルは Amoenitates Exoticae というラテン語のみで言及されている。その内容を直接的に説明している箇所もない。タイトルを訳す際、オランダ語の辞書を使ったとしても、Exoticae は推測ができるかもしれないが、Amoenitates は難しいであろう。にもかかわらず、原題とそれほど遠くない「廻国奇観」という訳ができたのはなぜであろうか。

まず訳者たちは『廻国奇観』の現物を見たのであろうと考える。それを裏付ける資料が見つからないので、あくまでも推測である。日蘭学会編『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』（日蘭学会、1980 年）というものがあるが、そこには『廻国奇観』の記載はない[29]。もしも幕府が所蔵していなかったとしたら、だれか所有していた者に借りた、もしくは見せてもらったと考えるのが自然であろう（上述のように、本が日本に輸入されていたことだけは確かである）。ラテン語の知識がなくても現物を見れば「廻国奇観」という題を思いつくことは可能である。『廻国奇観』には多数のイラストが含まれているからである。ペルシアの町や遺跡や植物、インドの蛇遣いの様子、日本に関しては茶道具や灸の図解といったイラストがあり、最後の第 5 巻には日本の植物の図版が多数組み込まれている。こうしたイラストを眺めていれば、本文を読まなくても、様々な国をめぐってその地の注目に値する事物を紹介している書物なのであろうという推測は、容易にできるのではないだろうか。「廻国奇観」というタイトルはそのようにして生まれたので

はないかというのが、稿者の推測である。

・『廻国奇観』という訳の定着

坪井信良の翻訳は出版されなかったため、一般に知られることはなかった。おそらく、『日本誌』が広く知られるようになったのは、呉秀三（1865-1932）の『ケンプェル江戸参府紀行』によってであろう。これは駿南社の「異国叢書」の一冊として、昭和 3、4 年（1928, 1929）に出版された [30]。呉は翻訳の底本としてドーム版を用いている。この序文で呉は坪井の翻訳に言及している。呉は坪井の手稿を参照して自身の翻訳を行ったのである。呉も Amoenitates Exoticae を『廻国奇観』と記している。坪井の訳を踏襲しているのである。抄訳ではあるが『日本誌』の本格的な翻訳として、長らくこの本が読まれ続けた（現在最も読まれている今井正による完訳 [31] が出版されるのは 1973 年のことである）。当然ながら、Amoenitates Exoticae の訳として『廻国奇観』という邦題も広く知られるようになり、その後、定着していくことになる。『廻国奇観』が定訳になったのはこの呉の訳書によるのである [32]。

7. おわりに

『廻国奇観』という邦題が定着していく過程まで追うことができればよかったが、戦前の歴史書、歴史事典、歴史教科書などを丹念に調べる必要があり、今回そこまで行うことはできなかった。今後の課題としたい。たまたま見つけた例を紹介して本稿をとじることにする [33]。

昭和 12 年（1937）10 月の『日本読書協会会報』という雑誌に、カール・マイア / 田中次郎「『日本歴史』著者ケンペル」という記事がある（17（204）, pp. 177-231）。ケンペルに関する研究書の紹介記事であるが、ここで田中は『廻国奇観』を『異国見聞記』と訳している。マイアの著書にこの書に関する説明があったのであろうか。幸田露伴の弟、幸田成友（1873-1954）は歴史学者であるが、オランダに留学したことから日蘭交流史も研究した。「ケンペル雑考」という記事（『学鐙』41-12、昭和 12 年（1937）、後に『幸田成友著作集』第四巻、中央公論社、1972 年、所収）で彼は『廻国奇観』に言及し、タイトルを「海外快話」と

記している。ラテン語の意味をきちんと理解した訳である。これらを見ると、呉秀三の訳書が出版されて十年近く経っているが、その当時『廻国奇観』はまだ定訳となっていなかったことがうかがわれるのである。

注

1）ケンペルの生涯とその業績については多くの先行研究がある。比較的新しいものとしては、ボダルト＝ベイリー『ケンペルー礼節の国に来たりてー』（中直一訳、ミネルヴァ書房、2009 年）が挙げられる。また、大島明秀『「鎖国」という言説ーケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史ー』（ミネルヴァ書房、2009 年）は詳細な研究であり、参考文献表も充実している。

2）この問題を調べてみるきっかけとなったのは、大阪市立大学名誉教授の小林標先生から、『廻国奇観』の命名者についてご質問を受けたことであった。ここに記して感謝申し上げる。

3）Kaempfer, E., *Werk*, 1/1; 1/2 *Heutiges Japan*, hrsg. von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, München, 2001.

4）拙論「ラテン語で読むケンペル「鎖国論」ー『廻国奇観』所収論文とその翻訳についてー」、『西洋古典論集』22、京都大学西洋古典学教室、2010 年、pp. 260-278.『廻国奇観』の日本語訳はない。英訳は部分訳が存在したが、近年ドイツ語による全訳のプロジェクトが進行中である。渡邉直樹「デジタル版、ケンペルのラテン語による『廻国奇観』の独訳」（『外国文学』65、宇都宮大学外国文学研究会、2016 年、pp. 37-51）参照。翻訳はヴォルフェンビュッテル大公図書館のウェブページで閲覧できる（http://diglib.hab.de/edoc/ed000081/startx.htm）。

5）坪井信良の情報は、日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、1984 年）p. 463 による。

6）このタイトルの漢字をはじめ、本稿において引用文献の漢字は適宜現行のものに改めている。

7）文化 5 年（1808）、幕府天文方の高橋景保（1785-1829）は『日本誌』の第 4 巻第 5 章を「蕃賊排擯訳説」（日本紀事訳抄）として訳出した。坪井はこの写本を所有しており、『検夫爾日本誌』の序文でもこの訳に触れている。しかし、「蕃賊排擯訳説」には『廻国奇観』への言及は見られないので、これが出所ではない。

8）大島明秀、前掲書、pp. 50-56. 本稿で以下に取り上げる中川淳庵、木村兼葭堂、大槻玄沢、松崎慊堂、十束井斎について論じている。本稿において、中川淳庵、大槻玄沢については稿者が情報を加えている。また、本多利明『西域物語』にも言及があることに気づいたのでそれも加えた。

9）帰国後の 1784 年にツュンベリーは *Flora Japonica*（『日本植物誌』）という本を出版し

た。これはラテン語で書かれており、ケンペルの『廻国奇観』を十分に活用している。

10）ツュンベリー（高橋文訳）『江戸参府随行記』（東洋文庫 583、平凡社、1994 年）pp. 167-169 参照。

11）日本学術会議・日本植物学会編『ツュンベリー研究資料』（1953 年）にこの書簡の写真版（p. 112）とオランダ語翻刻・日本語訳（pp. 134-135）がある。

12）実は、ツュンベリーは淳庵に『廻国奇観』を二度送った可能性がある。1778 年 3 月 7 日付のツュンベリー宛書簡で淳庵は、amoeni とその他二冊の本を送ってもらったお礼の書簡を前年に出したが、それを受けとったかと尋ねている（日本学術会議・日本植物学会編、前掲書、p. 111, pp. 132-134）。amoeni が『廻国奇観』のことであるとすれば、淳庵は二度送ってもらった（おそらく購入してもらった）ことになる。なお、amoeni はタイトルを極度に縮めて書いたもので（amoeni の後ろにはコロンのようなものが見え、これは省略を示しているようである）、『廻国奇観』を何と呼んでいたかという資料にはならない。

13）日本学術会議・日本植物学会編『ツュンベリー研究資料』は Amoenitatis exoticae と翻字している。たしかに -tatis の部分は i か e か判別しにくい。i の点は見えない。-tatis の形はふつう単数・属格形であり、ここでその形はおかしい。もし淳庵が -tatis と書いているとすれば、それは -tates を書き誤ったか、誤って覚えていたかだと考えるのが妥当である。

14）新村出「兼葭堂の一遺書に就て」（初出 1928 年、後に『新村出全集』第九巻、筑摩書房、1972 年、所収）。これは講演録であり、『蘭音類聚』については自分の昔のノートにもとづいて話している。新村によれば、『蘭音類聚』は兼葭堂の蘭学の知識を百科全書風にまとめたものである。

15）勝村典子「兼葭堂の『蘭音類聚』について－新村出の研究ノートから－」（「江戸のモノづくり」第 3 回国際シンポジウム実行委員会編『近世日本における科学・技術の源流：「江戸のモノづくり」第 3 回国際シンポジウム－ガリレオ , レーウェンフックから一貫斎まで－』、2003 年、所収、pp. 149-158）。

16）新村は「天明時代の海外智識」（初出 1915, 16 年、後に『新村出全集』第六巻、筑摩書房、1973 年、所収）では Amoenitatum Exoticae と記していたりするので、原題については記憶が不確かであったのかもしれない。

17）『西域物語』の原文は、塚谷晃弘・蔵波省自校注『日本思想体系 44　本多利明　海保青陵』（岩波書店、1970 年）を参照し、佐藤昌介編『日本の名著 25　渡辺崋山　高野長英』（中央公論社、1972 年）所収の中山茂による訳も参照した。

18）エンゲルベルト・ケンペル原著、志筑忠雄訳、杉本つとむ校註・解説『鎖国論：影印・翻刻・校註』八坂書房、2015 年。

19）この著作は国立国会図書館デジタルライブラリーで見ることができる。当該箇所は巻 1、30 丁裏、コマ番号 42 である。

20）『廻国奇観』での植物名は Asa foetida Disgunensis であり、ペルシア原産の植物として解説されているようである。第 3 巻観察 5（observatio V）の Historia Asae foetidae Disgunensis というタイトルの章（p. 535 以下）で語られている。玄沢の言うとおり 1 ページの図版がある。

21）『厚生新編』はフランス語の百科事典をオランダ語に翻訳したものを日本語訳したものである。フランス語原著は Noel Chomel による *Dictionnaire économique*（家庭百科事典、1709 年）という書物で、オランダ語訳のタイトルは *Huishoudelijk woordenboek* であるが、『厚生新編』に用いられた版（1778 年）のタイトルは、*Algemeen huishoudelijk-, natur-, zedekundic- en konst- woordenboek* となっている。幕府の命令で馬場貞由（佐十郎）、大槻玄沢、宇田川玄真らが翻訳に当たり、1811 年から約三十年かけて完成した。詳しくは菊池俊彦編『厚生新編 索引』別巻（恒和出版、1979 年）参照。

22）この部分は玄沢と宇田川玄真が訳した。『厚生新編』には他に二カ所『廻国奇観』への言及があるが、いずれもカタカナでタイトルを記している。

23）先に記したように、淳庵が『廻国奇観』を入手した可能性があるのは、1778 年 3 月 7 日の少し前と、1782 年 4 月の少し前である。その両年とも玄沢は江戸に居住している。佐藤昌介「大槻玄沢小伝」（洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版、1991 年、所収）参照。

24）テクストとしては、山田琢訳注『慊堂日暦』1（東洋文庫 169、平凡社、1970 年）、同 2（同 213、1972 年）、同 3（同 237、1973 年）の訳文を用いた。引用のページ数は、(1) が 1 の p. 93、(2) が 2 の pp. 148-149、(3) が 3 の p. 99.

25）大島明秀、前掲書、pp. 54-56 参照。

26）「ーチツ（ス）」という語尾から、単数・属格形の amoenitatis（アモエニターティス）である可能性もあるが、少なくともこの形を原書の活字で目にすることはなかったはずである。うろ覚えであった可能性は高い。

27）もちろん、淳庵に十分なラテン語の知識があれば、主格形で呼んだとしても何の不思議もない。しかし、当時の日本人でそれだけのラテン語の知識を有していた人間はいないはずである。淳庵がラテン語を学んだとしたらツュンベリーからであろうが、短い江戸滞在の期間中に、基礎であってもラテン語を学ぶ余裕はなかったはずである。もっとも、ツュンベリーは淳庵らにラテン語の重要性は強調したと思われる。淳庵は 1777 年 3 月 11 日付の書簡の中で、彼に「ピーター・マリンのオランダ語・ラテン語辞書」を送ってくれるよう頼んでいる（日本学術会議・日本植物学会編、前掲書、p. 108, pp. 131-132）。ただし、当時有名であったピーター・マリンの辞書といえば仏蘭または蘭仏辞書であり、おそらく淳庵の勘違いである。

28）大島明秀、前掲書、pp. 55-56 参照。

29）同上、p. 50 参照。現在、国立国会図書館には二冊の『廻国奇観』の原書が所蔵されている。その二冊を閲覧したところ、一冊は植物学者の牧野富太郎の蔵書印が押して

あった。彼の旧蔵書と思われる。国会図書館（帝国図書館）には大正 3 年に収められている。もう一冊は昭和 63 年に国会図書館に収められたもので、それ以上の情報は本にはなく、出自のわからない本であった。いずれも江戸幕府から受け継いだものではないことが確認された。

30）呉の翻訳以前にも『日本誌』の抄訳が出版されていた。島田壮介訳の『日本古代商業史』（博聞社、明治 21 年（1888））は、日蘭貿易に関する部分を抄訳しているが、この部分には『廻国奇観』への言及がない。衛藤利夫訳の『長崎より江戸まで』（国民書院、大正 4 年（1915））は江戸参府の部分の訳であるが、原文で Amoenitates Exoticae が出てくるところを衛藤は訳出していない。

31）ケンペル著・今井正訳『日本誌：日本の歴史と紀行』霞ヶ関出版、1973 年。この訳はドーム版にもとづいている。その後、1989 年に「改訂・増補版」が出され、2001 年にはその「新版」が出版されている。完訳であるのみならず、今井による解説と注釈、索引等が含まれた充実した内容となっている。

32）呉秀三の訳書が出る以前のタイトルの邦訳の例として、新村出の訳を紹介する。新村は著作の中で何度か『廻国奇観』に言及しているが、『外国奇事』『異国奇事』『異国奇事集』『殊域珍事志』など様々な名称を独自に考案している（『新村出全集』の索引を使って調べた）。Amoenitates を近い言葉で訳していないので、新村も現物を見て内容を推測し、タイトルを考案したのであろうか。

33）植物学の世界では独自の訳がなされていたようである。北村四郎「Kaempfer の日本植物記について」（『科学史研究』26、岩波書店、1953 年、pp. 19-24）によると、植物学者の中井猛之進は 1935 年の著作で『異国の魅力』と訳し、小泉源一は 1936 年の著作で『外国異聞』と訳しているという。この点については注 2）に記した小林標先生にご教示いただいた。小林先生は植物学者で東京大学名誉教授の永田敏行先生からこの情報を得られた。

ケンペルの著作・翻訳

・欧文

Kaempfer, Engelbert, *Amœnitatum exoticarum politico-physico-medicarum fasciculi V*, quibus continentur variae relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectae, ab auctore Engelberto Kaempfero D., Lemgo, 1712（『廻国奇観』、1976 年にテヘランで出版された復刻版がある）.

――――――――, *The history of Japan*, translated by Johan Caspar Scheuchzer, London, 1727（ショイヒツァー版『日本誌』、タイトルは簡略化した）.

――――――――, *De beschryving van Japan*, Amsterdam, 1729（オランダ語重訳『日本誌』、

タイトルは簡略化した）.
――――――――――――, *Geschichte und Beschreibung von Japan*, aus den Originalhandschriften des Verfassers herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm, Lemgo, 1777-1779（ドーム版『日本誌』、タイトルは簡略化した）.
――――――――――――, *Exotic Pleasures, Fascile III, curious scientific and medical observations*, translated with an introduction and commentary by Robert W. Carrubba, Carbondale and Edwardsville, 1996（『廻国奇観』第三巻の英訳）.
――――――――――――, *Kaempfer's Japan*: Tokugawa culture observed, edited, translated, and annotated by Beatrice M. Bodart-Bailey, Honolulu, 1999（「今日の日本」の手稿の英訳）.
――――――――――――, *Werk*, 1/1; 1/2 *Heutiges Japan*, hrsg. von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, München, 2001（「今日の日本」の手稿の翻刻）.

・和文
ケンプェル著、呉秀三訳註『ケンプェル江戸参府紀行』駿南社、上巻 1928 年、下巻 1929 年（後に雄松堂出版、2005 年）.
エンゲルベルト・ケンペル著、今井正編訳『日本誌－日本の歴史と紀行－』、霞ヶ関出版、1973 年（改訂増補版 1989 年、新版 2001 年）.
エンゲルベルト・ケンペル著、坪井信良訳『検夫爾日本誌』霞ケ関出版、1997 年.
エンゲルベルト・ケンペル原著、志筑忠雄訳、杉本つとむ校註・解説『鎖国論：影印・翻刻・校註』八坂書房、2015 年.

〈キーワード〉 ケンペル、廻国奇観、Amoenitates Exoticae、日本誌

On the Japanese title of Kämpfer's *Amoenitates Exoticae*, 'Kaikoku kikan'

GONOJI Masahiro

Amoenitates Exoticae (1712) is the only book that Engelbert Kämpfer published during his lifetime, whereas his work with a high reputation is *The History of Japan*, published after his death by the editor-translators. The original Latin title, *Amoenitates Exoticae*, is translated as 'Kaikoku kikan' in Japan, which means 'wonderful sights around various countries,' and it is not a literal translation of the original title meaning 'exotic pleasures.' This paper aims to examine when and by whom this Japanese title was given.

Firstly I argue that the earliest example of the Japanese title 'Kaikoku kikan' is found in the unpublished translation of *The History of Japan* by Tsuboi Shinryo in 1880 in the Meiji period, but from some reasons it is quite dubious that the Japanese title was invented by Tsuboi himself. Next I follow the history of references of *Amoenitates Exoticae* during the Edo period in Japan. As a result, most of them call the work by transliteration by Katakana (often not accurate) and no attempt of Japanese translation is found.

I conclude that the Japanese title 'Kaikoku kikan' could have been given in the translation of *The History of Japan* done during the Koka period (1844-48), which was lost during the war of the Meiji Restoration and is only known by Tsuboi's mention in his own translation. The translators of the Edo period did not certainly understand Latin and they might have invented the Japanese title by seeing the contents of *Amoenitates Exoticae*, which might have given them a deep impression with a lot of curious illustrations of foreign sights included in the book.